



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

1830
10



進退が計らず此時我士卒となふかけりて身伏被縛せんばのばとの時我國脇分
被んたる將帥の任を得ず共士卒の勤務とぞもんに及守奇正の節小齒に今我
其時の手習小形の振舞されとて或も弓が成し或も打物本敵く自敵とはかく事其
敵を去り後は中村を即忠將となりて其の若武者血まで半る勇者多く直先不
進ぐ切く廻ると頼義飼馬所と近付寄く中村廻子ト室へに忠將を
去處のを頼義頼李兄弟の人々小手痛く追従られふ懲懼く捲捲く迎てり
頼義飼馬所と矢端て何ますともや追与る小忠將半方壯勢の中流と迎ひて
頼義あも追みく廻ふ故は小猪へてれども左の勤務ともあらずや有りん准
止今とす者もぬうとくす程ふ源氏の先陣則經景通ふ愈えられ平家へ親と
引圓を因て其支う源氏と相引車引合ひまふ頼義の見詰ぞうめぐそへ
又敵よ絶き絶ひと則經景通ひふ驚き取く逐く本戸隙をぞ及乗る
周の木かつて通して左右うへきだ橋うの西のとく射出するあれども二人が物具

實食もば裏外も接に蓑毛の下へ折り取る左右の柱ふまとかけく引びらんと纏ひふ
百六十間搭並うる搭補五箇所より上うる櫓共よゆねくあらや唯今す側より内をばせ
タれ太防矢射くる者共もこゝの志下でくほり迎へたり則經も景道も元未無雙の大
力めす左馬助兵の安危を見ざんば序時も令活びた様か一是が奪返す追手ん
とす一念の力ふ百倍して極む圍も微茫ふ確け念うす本戸を破りたる二人が手者
五百餘騎主の後より深く本戸うち内ふ表と入る頼義鷲居を破りて城中に織生も
せしヶ邊ふ忠將を追徳て引組ぐ藤原も其首も立傷んと立病へを隊中の兵これ
城見え多勢うち兩義く我付さん圓矢も頼義鷲居は主從四騎を切て廻り駆ふ
被毛傍へ見てる所又則經景通が勢五百餘騎にこそ入れを歎又これを防ん
駆ぎたる其圓小許方の勢は中に入移がまし一程又則經景通が勢の二千餘騎
空二の圍を肉外へ追出一又迄今く時移がまで残り源氏の陣も兼多く往來殺百
軒を毀く難車に移後陣小要意一至るが處の中を投へさせられを則平にと成

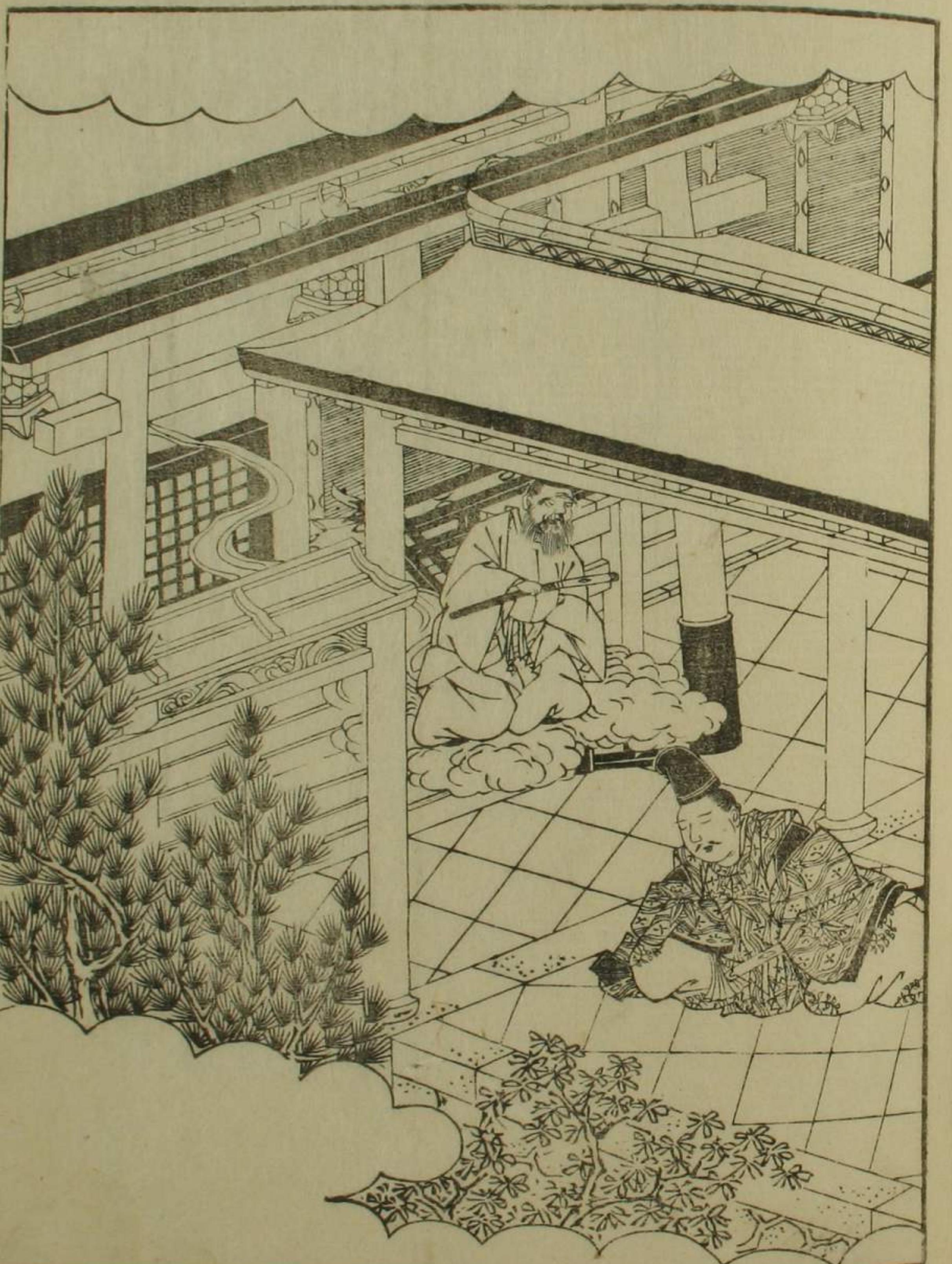
次第單雄の兵我先手と走て手を搔拂ふと擲て身を出一て推すうそを最本則
経景通が懐力坐て擲て柱懸傾またひまどふ恵てこそ忍被き倒れぞり源氏國を呪
中上向時お攻入を徑小平家防ぐ便を失ひ惱果てをまぢうる源氏の兵勇進んで互
彼の陣壁も大破けく煙の下よう切くかす重岡を攻すと多を擲を失ひて下家勢
勢一慄もくとが容も弓矢と棄物具脱くと是先手と廣く行鑿事今ハせん方ねく
一主手本國小守て重く雌雄立せ先手とて萬行勢及び文也く奉ふ下団よ団子
源氏凱歌三度上高を人馬の足を体へまづ

賴信渡海忠常降參

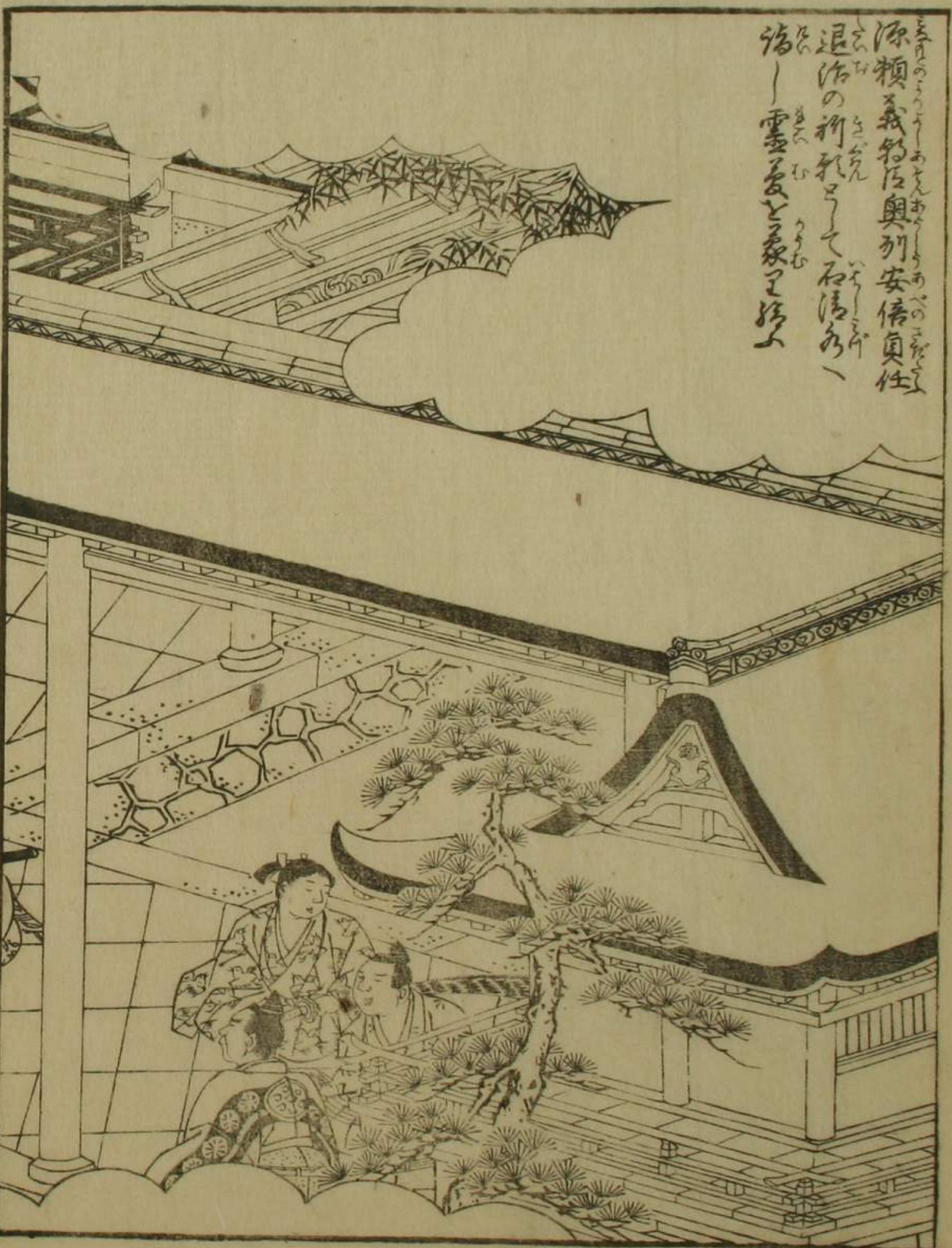
同年四月源氏五萬騎伏草して忠常が城下推寄ら房押は城も忠常今度
威遠もく若利を失ひて山城小松を一とく接至る要隘をくぼら高山嶺く
隼へ人馬の力あるた候もゆくあひ太海度く遼へ船もとて濟をと通す船も小忠
常が下知ふすれく漆々の廻船浦その湊船まで忠く取限一海上武二十里の向か

一葉のあゆすもあをたり鐵の車ひく船と合船まき小船並大時も士車も實際
おお處て遙ふ跡を守るゝ念を捨てねて大將はもく海に見ゆうて君儀潮
やあかと云ふ者く見ゆるゝ潮運巻浪磚と最も惜き所あづれども備奉る潮軍
して安定みも見分難かりなれを仕補せ者やも厚き召りにひきど處ゆる漁父を
人を奥にて參りて大將濟馬近く召れといふも漁翁若は海を馬めぐ海走る
懶の有るかと問ひのなれをか者やは其車牛を作は浦ふの懶の仕が所の者も
多くこのを御はば平澤よ漁ば水の肩波也作りて懶の度へ二十間ヶ程も作
く去おぐ唯今ハ濁渧生てあり師先作(さき)進浪立と満來とては清懶と渧をも
思ひもちて作未申列お至くハ千沙小底工唯其時濟波一作(さき)は翁が懶踏して
進くせ懶一坐やなれを大將斜(きわ)らば妻(めい)のまきぐれに如地(じ)と賜く卑濟馬
孤進先作(さき)の名を徳軍勢也成衰くそもは海馬の足のえをた様もだむ少
おう賢(えん)と不審(ふしん)と不審(ふしん)不彼(ふ)漢父濟馬れに小毛村(こもふる)せをも
事

既に序車がや浅瀬と申せども平澤の時不も馬の足も多がて増てや今ハ濁渧小
波(おき)が波(おき)と潮の度(ど)で一向濟(き)侍(まつ)ひと強(あつ)め留(とど)めを大將お矣(ご)
申れ所理(ことわり)をも濁(おき)の干(ひ)故(ゆゑ)もあらぬ平澤みがばあや濟方(さいがた)を加(く)く漁(うなぎ)
かと儀(き)をえく相(あわ)ひて其所(その)責(せき)めたる何(なん)の勝利(かつり)あ(あ)ざき歎(くわい)の思(おも)ひを寄(よ)かれて
馬(うま)を海(うみ)に覗(のぞ)む觀(くわん)面(めん)小(こ)責(せき)めたる何(なん)の勝利(かつり)あ(あ)ざき歎(くわい)の思(おも)ひを寄(よ)かれて
淺(あさ)いおきば(おきば)の海(うみ)に漁(うなぎ)満(まつ)たとも騎(き)馬(うま)武(ぶ)者(もの)甲(こう)の手(て)返(かえ)る船(ふね)程(てい)の半(はん)ひある(ある)とぞ
被(おひ)せ者(もの)共(とも)下(おろ)かて真(ま)先(さき)不(ふ)進(すす)まく遠(とほ)小(こ)馬(うま)颶(あわ)く
士(し)車(くるま)みか後(うしろ)をドモ一度(ひとども)に馬(うま)をおひて大(おお)將(まつ)も中(なか)小(こ)新(しん)整(せい)し路(じゆ)の筋(すじ)傳(つた)ま
殊(ことわり)の両(りょう)顎(あご)とひづく大(おお)歎(くわい)が深(ふか)いと仰(あお)頭(かぶ)くいはが憂(うき)愁(うき)と憐(うき)みて今(いま)其(その)德(とく)
然(ことわり)施(ほどこ)し濁(おき)水(みず)萬(まん)里(り)の外(ほか)不(ふ)退(しりぞ)め納(な)受(うけ)を二(に)軍(ぐん)北(ほく)陣(じん)小(こ)垂(たれ)路(じゆ)令(めい)頂(とう)禮(れい)ハ憐(うき)宮(みや)



前立ノ狀一



山の如く小瀬を湖底小千波とふくねの馬の蹄灰色ばかりす。瑞氣霞光とされ、管
兵船じう勇さん源氏の武徳神龜ふすとく威意忽顯れうと喜んで渡て至
され都合五万怪騎の兵ども一騎も溺れぬ海と御接觸用を馬坐て渡て着道
いあ代りもいまど聞に未だ有難いや奇美のそひがきにうち城中より移とも
まだ船えれを詔の書へと移かへよも又浅水を渡じたひ知らずには大瀬子
渡さん半らひま、兵を擣手よりおせんとせば追手途滅すて二日後へ迎
付得ドをみかを空物具をモ取法へぞうに強を述一馬坐鞍並び或を酒
者設けく方今什物語一或と傾城妓女小松を取べ一役の豪小千家の情と契
一向要公の侍もかた所下山海に劫擣して岡親く岡乃わをこの仰半北生身するぞと
色派失ひ度方ふれ親子兄弟以集先篇支度見るも何う一族即ち引合て障
人本物もあう准わせく防減んとする者一人もねうるを忠常大ハ急く云甲斐
なき者たゞ振舞歌の分際何程の半角あざきを況け要害もく清示ぐる小

何百万騎もくほすとく瓶く戦ひ負へとくと太も上く匍アタれず、敵て耳もく聞
連舟木引進あらを誠り是またゆく彦行ノラ忠常はきく因業しけく我今運を
途窮く士卒十方小分散せうは上へばくへ薦けうと重く大軍が靡さん半
弓も付せずア馬坐て海を隔て御の猛將小畠國兵をりて半面伏向ひ
所金忠常う運命こうに免て歎迷も死んざる余款の軍將頼信と剣達て死を定
はせの男の出あづれを作て降参し、隊旗の迎付寄てけ存念と遙べて也屹
室公中に計く執事半田入道安慶を呼びて降参まづう一細くゆき含みく
源氏の陣を遣して千田行向てこれ忠常が降居千田入道安慶使ひて
て泰向仕くろう申入てうなれば後森内則經出向く其後とて千田申名ハ作
忠常一门の不和るをりくとあよ宿意次逐んと欲まつ所小園じて天下
の済款やつお成る半素う忠常が心ふあくに頼く心慕下恩免をまつひ
以性の罪責を許し候て顎を伸て降入外出身とゆゑふとて馬廻の走車

中頃徳小範恩を謝せんと言ひて申候り則經頃く駆せ申上方がる將官ひなはる
非を悔過改て降參まことうむ神妙小作郎對面あひてそそ使を返し宗徒の
疾人等に向ふ事ひ方々忠常坂東の英傑とて勇名八列小冠より今續の志を居小
夜く食紙拂ひ犯を多きに降參せん幸頼信敵くひよ得ど必定追付寄く頼信
を犯を共ひませんと思ひまわす面をゆびあびきほそて擄捕へまを致しておを拘置
され少く忠常千田へ道父ふ兵小腹ひの者もぞとぞく這きと兵ニ之後小延ひ出よ
ありゆばゆく力革の差ある兵二軒よとく並居く生隣人の法されをとて物具を
刀劍を信を要意の兵役と書く高手か手をぞ擷らるべその忠常ふゆかく
擷られ巧く智略相違くは將を從事形見とて千田父子を共に同と國公是入を
薦孤して悔忌とも叶ひざる天降の程これを清様是其外の隊合三百八十餘人之擣
小忠常先の男ふ二人ある由圓(ひづる)が郡忠將ち左馬助殿の手からて付と
決戦ひまど見(みまど)其の向後ひさとてるぎと隊人の者ふ向き立よ忠常深板の

初先次郎三一案に陳ると母懷尔抱き安坐身と腰く祖父常陸介正茂洋子小弟
ぬまつ申なら朝請の末取と云出でて殊せむまへりれども正茂が今度は參ま
免トて却て次頃ゆく間まうゝ成人の後ひ千葉助常將と名められ去程小源氏の
兵城中小丸入主摺没所下火を無て凱歌ニ慶祝く萬歳とぞ嘆ひ立るこれ故
見圓(ひづる)忠常が心中にモと思ひきされう去傍長元元年う威を振あひ
振ひ度々の軍に勝て多くの武士は歎美うしに頼信船の武功小服一船虜
空成小なり供ひて東園の武士源家は威名を作と代て其下風ふとくに奉
市を帰するが如く乃て頼信船に十船小運あひくかの殊事を尋ねて其外數を詔せられ
頼義頼季則經景通等小軍勢と相謀國を小分遣し其外數を詔せられ
少く一旦忠常が權威小服一船催ひて者なれば一人として遺恨が存ド
天下の済款と詔びと達ひの者よりて程小忠常服一車園忠常登小隊一万
兵安堵小付小うかう程小頼信船の官兵都合五万三千餘騎兵小生捕隊



前立光四



人を引退し都下に陣し終ひうち多々小患勞路次より病氣以外より少く醫療
少加されど馬々く遂不都下にて焉まて是後國坐て久しきが如即首領新しく都に
上を生捕と共に檢非違使の廳小波され定ば生捕十回入道安慶同左郎充尚と
河原に出し肩と刎て忠常が肩と共よ獄門中を曝され斯く深底の業に勸嘗
行をへてそぞ大將軍頼信鈴弓を從四侄上を叙し左馬頭ふ任せられ乘くの
所至るふもて因の昇殿を聽され其外一族宗族の家入等も軍績の深浅よ
りく官位を進み俸祿ふ頃ころ中身と左馬助頼義鈴弓は小一條院の沛主に
依て院の判官代としてまことに智勇射藝の世よ勝とす半分知尼院中
此半分も司じしを因の沛遊獵の時節も召與せられんのみなまへけ見ば是
よりは後沛狩每小頼義の矢先を獲らる者甚多く然も弱ち故好むに轟つ
所の矢羽を飲びとす半野へたゞ猛獸とゞ強小應とて必斬る其射藝
の巧萬人不較る半かば一院の沛感小頃モ甚賞哉され終す遂不判左

八幡太郎殿誕生

代の房にあく相模守源朝は頼義任限免く河内國小守にて鎮守府將軍平

貞盛の嫡流上野守平朝臣直方の息女を貢ひて婚姻の儀式を以て誓文を契
暦下を月日重て其年秋の末に成ぬありとす者扶持てばへ斗姥る後とて
石清水八幡宮小守で朝小祈立に賽にて志を運んである時頼義鈴弓は宝殿子
參詣し通宵音と傾け精念とし祈念ありて少く睡ねて不承り神を奉白其の
翁と魂とおつゆて二寸の靈劍を頼義小賜ゆて感慕の告げて驚き頼義
大喜びて即其枕を見経ては果て一柄の靈劍あり機感を相應せうと翁の首
難と小感疾を押さ高君の奉幣して清貧小守てほのかの靈寶と安置し一永一家
の珍蔵とし終て其後か方より本願を垂れて翁の體て臍胎と終ひう死て月後
て長慶二年七月十四日河内國香岩寺にて佛事安平に男子誕生し終ひ

は其性直人乎へかせば神靈の化現苟不揚然せりて下る父母の請妻申中
海に祖父の河内鶴呑頼信も子姫として奉に拵へりて別室に深太丸室名附
手摺抱きの太半せひとすと冊記名ひたる頼義鶴呑も深太丸室名附
とて喪小威す物具一領を進せられ候尋常に替て最異うる様なりされど
嘗あらぬ半へとその人これ称候せうされど此禮後代ふ傳て源大が產夜禮
とも又榆無禮とも呼考拂一族門葉を申以及が後法の太名其家承の重寶つれ
くを是後けを貰へねらむ無うる空とぞ精長とおひせ業とよせ付與し
附へすハ賤太郎義家を名あせゆのちさねた成長の後武威を万國の外
母孫の姓名千家の後ふ傳くは苗裔空きて源氏の嫡流とて特よ繁榮一
族の裔也他家も推益く実績せぬが故うと其後相續て少郎属も誕生志
たるい女子も一方生來終ひゆしく生立活ひたり

通法寺草創頼信朝臣逝去

長曆二年に之終之翌年もう長久元年とめ頼義鶴呑頃年遊獵高麗に
を試ふ不日又思ひ立べしと共用意せられり騎馬三百餘人列車も八百餘人なく
頃は長久四年九月上旬渤海邊より為難葉底も小陽の獸の狩杖の多小強ひられ行方と
失ひ起ゆる公追かひ射すもあリ列車に洩るる手負猪二の矢公盡て追すあひ己が
獲者と乍く小早せ鳴呼漏げ入るもあリ最風流くぞ見て小笠の頼義鶴呑公久く
の優劣を見ひそ、零下十度の寒氣に小儀に山中冒涜すと京本の通まほぶざう金也の
光景めり寄坐四方を芬郁すう清俊の人を惜を感じて者かく其光景すて草
押分これを見す小親小千手親自在薩摩縣裏うており一タリ頼義鶴呑人小驚
嘆しきひ馬うて死下ア誓願合掌して甚く恭敬あリ傾て聖宮と自接
眞をす直小濟鉢に厚て所ひ館の南より一宇を精舍公建立一かの尊像と安
五つある通法寺と號し密宗と修し今ふ絶せぬ靈區なり其後承永三年



八月河内鶴は頼信俄不多田の廟所まで奉宿し終ひ一七日の法事と被せらる立一日始めて中月廿四日へ攝羽鶴尾頼光の忌日又被鶴立七月二十六入道殿の薨逝の日ニ右北門若果一逐ぬどハ父足小向ひあつ孝義は義を感せう又頼義を姑老共が武勇名程とも見はざば公少かは幸耶一よも父祖の名と汚れむに幸ハ兆トモテテ也太郎を軍十一歳に成ぬこれも服制も嘗て父もハ為勝アテ見ゆキシ次郎ハ八歳未完成され明幸ハ元服をまゝ我幸小賀侯祐小指で首を傾け一幸幸久一ちとば次郎と明神小秀附あるべれべ太郎が例ハ仕セ資前小具アテ首服アテ賀辰次郎と名乗ハヘイなど細くせ言ひく法幸滿く翌日廿八月河内小守経ひそりかく九月朔日享年七十四歳にく異形の體アカくて薨ト経ひ方丈此卿の生涯位進上四呂小列一内の昇殿を聽され六箇國の受領を歴て鎮守府將軍を兼河内國小封一人性智謀才業に優れき畠山城主冠ナラ長元の逆賊を誅滅シ先帝朱雀の宸跡を体先ナラ因生發寶闕の衛ナラレ定業限あり竟小一斤の糧

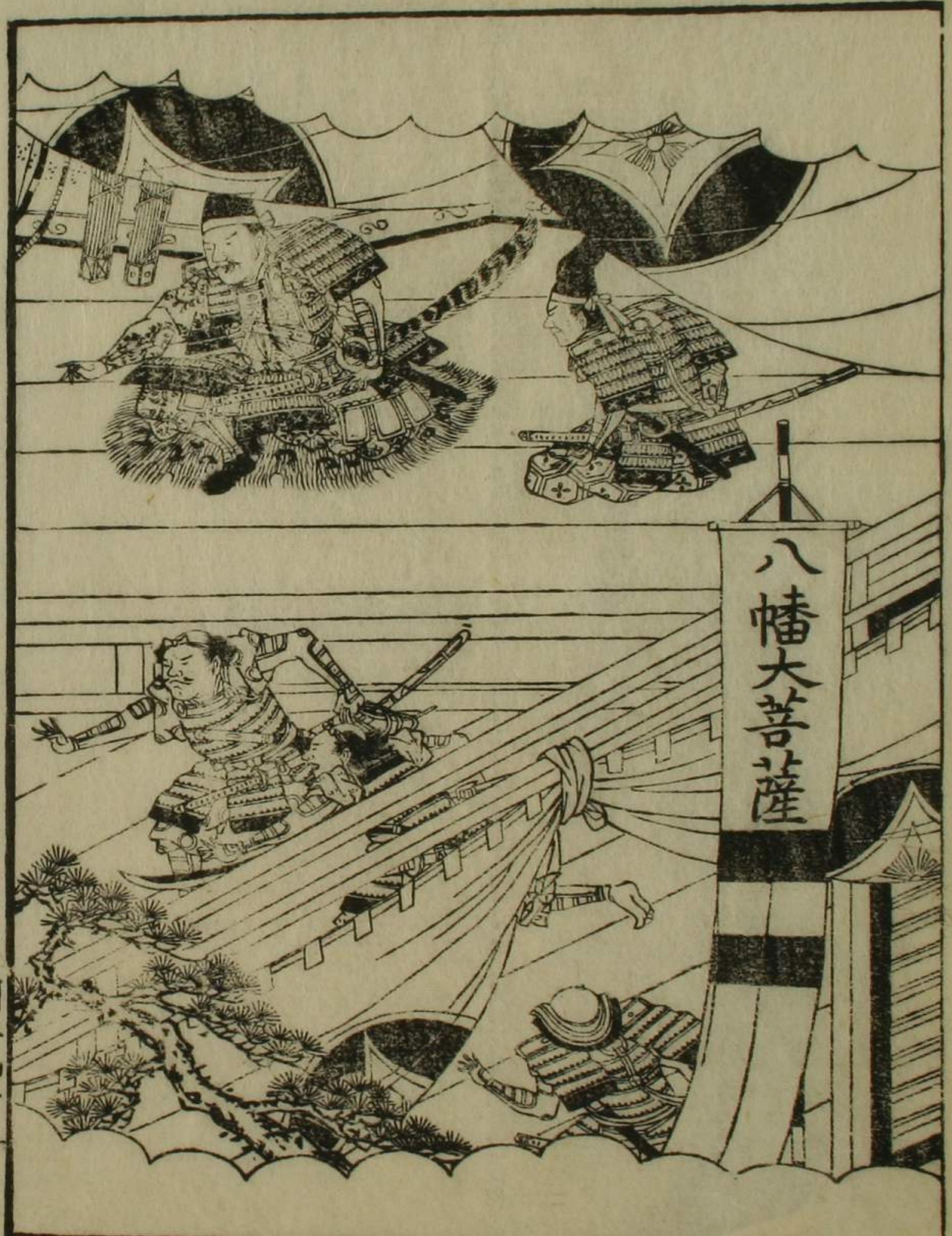
賴義朝臣奥州下向

とお詫びテ則法名公蓮公と號一通法寺北塞の方々山上小墳墓公葬ニ
尼寺く教養作善慶重に執官せ給ひタク

13 小奥州六箇郡の同安を支安信頼時とノ者ウチ祖父忠頼ハ酋長アテて威名
その下振ハ六郡不様行ト万民を却置シ子孫を滋蔓一子從政益強ナラク頼時が代
母刻ミ騎着日來に百倍アテ上國自の會に貢シ下郷民の税を虐げ賊具を輸送
儀役を勅示奉取一准人ハ敢てこれを制シテ未秋既アサセ授意持正長男ハ早世し
次男厨川治郎主支貞任姿寫海三郎を生家姓黒沢尾四郎正任磐井丸郎家任
比浦六郎重任比興多七郎則任とノア女夫二人めうた一人ハ直理權を支藤原經清
とノア者公娘セ一人ヒ伊具十郎平永衡公妻也白う其身ヲ衣川不要害ハ構立案ト
之小住モ猶テ小南園の大字藤原登任ほくく頼時が行孫伏見く里案一けるも
吾南園の同ノアカホ承札と見取テ若ク終ヒ忽テ小沼也騎着日小沼也一國の貴

民の憂願天下の劫仇と多く國家の殃禍難免を度むる
兵を起し連手謀伐せんがあくかにと執事甲斐へ道宗忍と始末を以て
て吾意見を同じたる所すか極びて旨申じて出羽秋田城今重成と平朝
敏盛の孫経立將軍の二男もく武勇の聞く有れど重成の方同意合併して謀
叛を起さう云送され乍ら重成子細かく頼學わうて承永六年二月十二日重成
之二子経祐坐て先陣ふゆき陸奥太守登任三千外騎もく後陣ふゆき恩切郊
り之所みて合戦一けりに重成登任利もくしてお員右衛左衛少衛行冬り登任毫
傑小都小逃上り重成もく國小隊く後陸奥出羽の森國内同じてまことに者一人も
將を立たず往不妄を支頼時運威を振ひ國中自らかきう有りて庶々たるこねよそ
國をうり早馬を走せしと萬公岩ノ半隊からうる圓公卿食儀もく南内添頼
義軍族の間不存く勇丈夫氣群を秀えれど坂東の武士其威風と望半隊兜の
母を裏立が如一これ則將帥の器も足りうせ群卿言ひて多く參り申され候
母を裏立が如一これ則將帥の器も足りうせ群卿言ひて多く參り申され候

主上後今院則勅許あつて源朝は頼義を挙擧され乍る去程小口年六月七月陸奥太守
兼鎮守府將軍源頼義河内山香呂峯次守立清一族より嫡子八幡を節義
名。次男實茂次郎義綱。沛會才肥後守頼清。同二葉掃部助頼季。門河内冠者
頼任。常盤力郎義政。瀬波守頼弘。鎌殿助翁光備。赤守實國。左衛尉行實。若
部正國房。土佐守頼仲。伊豆守備綱井。上三郎左支備實。河内右馬允。守任。國井
太郎政清。駿河守定宗。左衛尉定重。善積前出羽介忠國。あれど孤宗後の一族と
してホクの源氏三千餘人代家の人々が加藤修理少進累通不恩右馬允景季。門武屋
分貞輔。大宅を支光仕波多監毛庫。今佐伯経範。門経秀。門左衛尉季清。後藤因則
経み恩坂戸判官則明。門大監物時家。首藤權。分範季。大田を支行政佐藤。を支清つ
散位和氣致輔。門為清。孫原茂頼。清原貞度。日置左郎。藤原季。後物部長頼。由
良。新太郎盛弘。門次郎義弘。坂上判官圓資。門次官加賀資。太内介家底。誠。守平
中方。左衛尉日義清。等。孤姫。とて都合其勢一万六千騎。門八日石清也。に爲て京都



二月近留あつて十月近江國望洲河原と高野山本源を支章經四百餘騎至て下
向近留より馳かることを好んで美濃尾張東海の遠江甲斐信濃伊豆駿河の軍兵下
の路次木内安と二百騎三百騎五百騎千騎我もと奉行門才吉相模國小笠の
を塗食權頭景成ニ而後騎はく拂近小卷ト則塗食の鉢不へまづ多く不食豆に
そとて二月近留あつて法軍の披と体うる専國の後へ浦を即公私一族相與一立
而後騎をく拂族鉢不泰向其外専公の武士を生年は朝臣専國の守く——時
仁愛撫育を務ひ——幸形正今度ト向を委ひ我もくや馳奉どあじて邊境より
東の者共を其下風より幸公のせきと參る者無うるを以て將軍塗食權
八幡宮を勧請幸長と専官廟と形立と塗地紙ト是筆内せよと令て入塗道を言
至丈塗道を厚く今後夷賊征伐の祈れる専國が於て一之御殿を設け石清あ
八幡宮を勧請幸長と専官廟と形立と塗地紙ト是筆内せよと令て入塗道を言
奥して清篠亭の通を以て延屋——終ひに日本由比郷の中にて無双の勝地あり脚持
車こよぶかく自一塊の土を付ト壇と絶えず向敵切かりて遙ほ室主源男山の方を

伏拜と朝欽伏株の後て小梅——あ冬——玄盤鴨奉取とて深くせ行持した
まひさり

伊具十郎永衡被誅

去程少頼義船は衣河の様と聞石いふく拂候甚——く安信頼時一家一人を拂
除城吏——とく軍勢と偕され多す小國中の兵士を申に不ぞもと事降玉多氣
權守宗基下終國多小山城の二頃武志國多ヘ戸川城相模玉多ニ浦塗食
上條少少方賀宇都官秋方ドモ馳集マタ程小忽雲房のどくに充満すね軍
頼義教万の士卒公近ヘ衣河へと表向むる頃時か輒直理權を支経清舟と信良十
郎永衡少首男少殺モ手勢引其一將軍の拂勢少かくて日衣河へと向ひ多何見
もみが思ひくに少立多中多も伊具十郎永衡モ特不脅少く彼城の侵少根乃
甲少居少れモ一隙勝とく拂ふ由と發見あすくぞあたる少く少羽國の位平吉
支國姓とりよ者竊少將軍の拂本に奉ドて申たる少十郎永衡と前奥州登任翁

臣の郎従をく坐閑ゲタよりて重く恩顧アシカニを蒙がす勢に奉ナガルに勝マサニて然ハシナふ頃時ハシタ娘
孤相アヒヤ失ハシナてから後忽主君の至恩アシムと名モ大守シモト不貳心アシムて去ハシナる也承六辛切郡シモツ
食歳シモツ小男頃時ハシタ與ハシタて雛主登仕ハシタまろと引遊ハシタせし不忠不義の所居ハシタり越ハシタ今
又津方シモツに属ハシタせし車閑ハシタ敵ハシタ意シモツを得ハシタに參ハシタと居所外歸服ハシタの相ハシタを経ハシタ肉身ハシタ奸ハシタ條
の名シモツと挂ハシタ陸本頃時ハシタ陣ハシタ小軍使ハシタを通ハシタ御方シモツの深畧ハシタ軍勢ハシタの効驗ハシタと若身ハシタ奸ハシタ條
きよべし又善ハシタ所ハシタの甲母ハシタ常ハシタひ衰ハシタ是ハシタび合戰ハシタの時敵ハシタの軍兵ハシタをハシタふ已ハシタが
左所ハシタをハシタかく射ハシタをハシタ下ハシタがねうりハシタれを赤渓ハシタの赤肩ハシタ三圍ハシタの時の表巾ハシタに屬ハシタる
これが軍別ハシタえぬなしげや乘ハシタて君ハシタの毛ハシタぬハシタめハシタしハシタれが今水ハシタ瀬ハシタが限甲ハシタ以
着ハシタせしもかの表巾ハシタを肩ハシタに仰ハシタて單ハシタく染ハシタと深ハシタせられ故ハシタの内通ハシタ死ハシタりん更ハシタ生ハシタト
とあを存ハシタト無ハシタとを底ハシタを残ハシタせしとば時軍ハシタは理ハシタ信服ハシタあり焉ハシタは深ハシタせしと
生ハシタと死ハシタを定ハシタるされど十郎ハシタを努ハシタ投ハシタ相ハシタ失ハシタた且ハシタ車卒ハシタふひハシタてあ不ハシタ直
の氣ハシタには大体ハシタのあれ小卒ハシタといひ故ハシタの物ハシタと振ハシタてまことに想ハシタとらハシタけるに停ハシタゆく

作付ハシタ有ハシタあつと十郎ハシタと召ハシタ承衡ハシタ何ハシタの身ハシタ付ハシタて序ハシタあい奉ハシタト大体ハシタ見渡
せば大將軍ハシタ中央ハシタの曲承ハシタよ坐ハシタ一筵ハシタ左の上ハシタ席ハシタ拂ハシタ拂ハシタ子ハシタ八幡ハシタを即ハシタ義家ハシタ右の上
左ハシタ拂ハシタ男賀ハシタ底ハシタ即ハシタ義綱ハシタ其外ハシタ沖ハシタ一族ハシタ三千ハシタ人ハシタ左右ハシタ坐ハシタ終ハシタ外様ハシタの大名ハシタ六
千人ハシタ直ハシタ密ハシタの袖ハシタ重ハシタく群ハシタ奉ハシタ車ハシタの伴ハシタ魏ハシタとハシタ實ハシタも様ハシタあづげ玉ハシタを是ハシタへハシタあが
承衡ハシタもハシタてひむ中の深影ハシタとハシタ一幼ハシタの浮ハシタ沈ハシタ今日ハシタ不窮ハシタと頻ハシタ小胸ハシタお騒ハシタさねどは
く陳ハシタトて見ハシタやと思ハシタい何ハシタと詫ハシタ被接合ハシタせく仰ハシタい始ハシタつ時ハシタより候ハシタ理ハシタ少ハシタ進京ハシタ通
る軍ハシタ北上ハシタ意ハシタを受ハシタく承衡ハシタ小向ハシタてやる今度ハシタ頃時ハシタ父ハシタ不法ハシタを犯ハシタし上ハシタ新軍勢ハシタと體
良門ハシタの國ハシタを封ハシタた被逐ハシタの如ハシタくふ極ハシタの依ハシタて公ハシタ代せんを欲ハシタめよに阪東ハシタの猛士ハシタ無
二の志ハシタ傾ハシタけ雲ハシタのやハシタふ集ハシタと雨ハシタの如ハシタくふ春ハシタ房ハシタ一人ハシタ拂ハシタ方ハシタ不育ハシタ志ハシタ不通ハシタ其機ハシタ所ハシタ不融ハシタきら罪責ハシタ逃ハシタげ就中
獄場ハシタ小於ハシタ馬ハシタ物ハシタ具ハシタの奇ハシタ異ハシタ其ハシタ身ハシタの分限ハシタ小從ハシタく用捨ハシタまハシタと之ハシタども今承衡ハシタ
が者ハシタう所ハシタの甲群ハシタと同ハシタかにこれ歎ハシタ事ハシタ方ハシタ相ハシタ更ハシタふ時ハシタ承衡ハシタ在所ハシタを訪ハシタよちハシタ矣



前五ノ四十三



修水を渡る
佐原山の上
を走る
船正

濟方に進退伏告んあれ又敵ふ我を射モトダガ我半は兩端を出トはかの旨候あれば
迷よ陣ト申レヘ一也云渡レされ承御一言の善あく有ハ他モぞ居マタる景運
譽景季に屹ヒ同命ヒたゞけ見モ右馬允ト走裏ト起レモ立ビ取て押ヘ反グ
拗出ノクルシ水衡ガ骨肉の節従四人中門の外ゆく生捕且主従吏人忽肩公列
ウリ其外の隨兵千二百餘人或モ落失せ或ハ罪を謝レテ降人ふ出セナリ圓理權を
支経済も頼時が聟々れば罪科逐ベカジモて審れ多よ職モ主事と頼時ケ陣衣
門不共迹跡アリ

靈泉涌出宦軍止渴

都ニハ今幸頼義の往來ヲ間又器量の武士と擬フミ新司と捕セラ所といへども若
合武の告伏聞ニ辟退して仕小計に清卿議奏して重て頼義執事を任ト
而賊徒征伐の義を逐レ先別倫旨下忌セテ頼義猶古再び朝擇不意ト一面
固身不咎ニシムば朝敵追伏の義を專とせんと軍議區々ナリ既アリ今幸も

國内ちのニ餓饉一耕トモ秀淀耘ヒドモ登ビ兵糧一粒の資貯スルノ間法西の軍
勢忽勝送不勞ヒミニ已ム國ニモ甚囁アリ依ニ相援ニ夜門を攻ムトモ半モ
叶ジ空く年序と送リカマニ程少頼時ヒシテ連威を振ヒ將軍頼義の威恐
フ是ビトモ尚々雅志欲舉勤ラク少く宋次遙ニ極アリ天喜五年にナリナモ
將軍ハ鎮守府小かりタリ六月御金を召ムニ室八九の傍モ頃年凶弊民苦モ
糧食給セバ太衆一散トテ催促再び難ヒセリドモ頼義苟朝承北指不應ト
再び勅廢小着仕ヒテニ樹の称號を犯レ朝敵追討の論言が發ヒ故ニ國公賊徒の
馬蹄下汚され使小年月然遂ニ半あキ安ノ木板たゞ兵糧の資貯ニ軍勢催促平
従ビトモ我一族即従至一人も残シテ夜川本推寄かの城を拔テテ付託せんサ
思ムナリ面々いふと室ヒタレハ各一義也モ没後左と曰トてハ六月五日鎮守府と立
て夜河へと發るある安信頼時斬ヒ國ニモ脅良昭よ四千餘騎を相随ニ日七日
途中まで出向ヒ先々アリまき武三里が征カモ色テラニ本官軍の勢不併合歟

頃て雙方備を立蘇波坂上をまぐ早入札とく致つてうる將軍の勢を僅七百騎もも
生れ故の陣ふ比きべ對揚をさこまでもかれた小勢たゞなれどもみが全滅の即促せり
それを些とも退屈の体もゆく馳合を圖あらせらす成か物小成く亦よ殿を復か陽れ
面も振る身と情に火を散して手残ひるゝに一勇男傍くる良服が兵ともかくすくて
わざう頃しも六月上旬よりでだよ炎暑凌ぎがまくふ涼す汗ぬあとか一身心焚か
てくこそ口中の渴ふ涙ひそり剥ば三十日雨降らずに深田の畠も烟と空
事か絶ざる谷みも天公雨病と下まひ一然の活路く砂は敷が如くうる軍中みと求
かひ巴が血を吸湯す汗もく脣外濡れ差は時歎一嘔も痛く責むほほ
名所方も一定敗そべりし然る軍は肺勞吟眼した軍して大勢却く小勢に
圍まほ全く見へて猶不恐きと進じ歎えね一肺方の歎の邊付ぬと能あへて響く
息從居すうる乃くひ強敵よ當ん半いづれもけひぐく見へてうるる將軍遙く
車の方を伏めし至信を新念へおひるい傳聞昔時後漢武將軍李

武帝の勅び奉く夷賊を責へし陣中水を渴ふ責らるる小糸を抜く者を死刑一
萬泉忽涌出て万車渴死質す今乃頼義躬歎となく御勝利ありふゆうせつ
三軍渴え殊んくいえもすまかく僂漠時異うやりども其例相似う當今後院
の聖徳何ぞ漢王の徳ふ如きんや臣が忠義寧貳作の忠奉比する事無くんや歸命
頂礼通法枚坐大士擁護の手次垂経と懇精を致して志高く禮釋恭敬あり自弭
をもくく孝と穿ち給ひて眞小大悲の感應もや燐も如た寒廉も禮多儀少漏
通法寺と號し八幡を節度の安中に被と給ひて觀音の小像次安坐しもつたひ
は所を北加農川と名附くこれに勤め悉く深伏の後こうふ一宇の梵刹を建て勅
たり去福よ法華かく奇福を見あつてほどく勇進どん加葉後藤前藤塔
太尾佐治の子と始めて後代の家々恩顧の節従都合六百八十騎應をうて切く
出縦模毎至る萬をば良昭然ひ仰そく兵數多計せけり已が令紙活延び

安計をく夜川を守りたれ

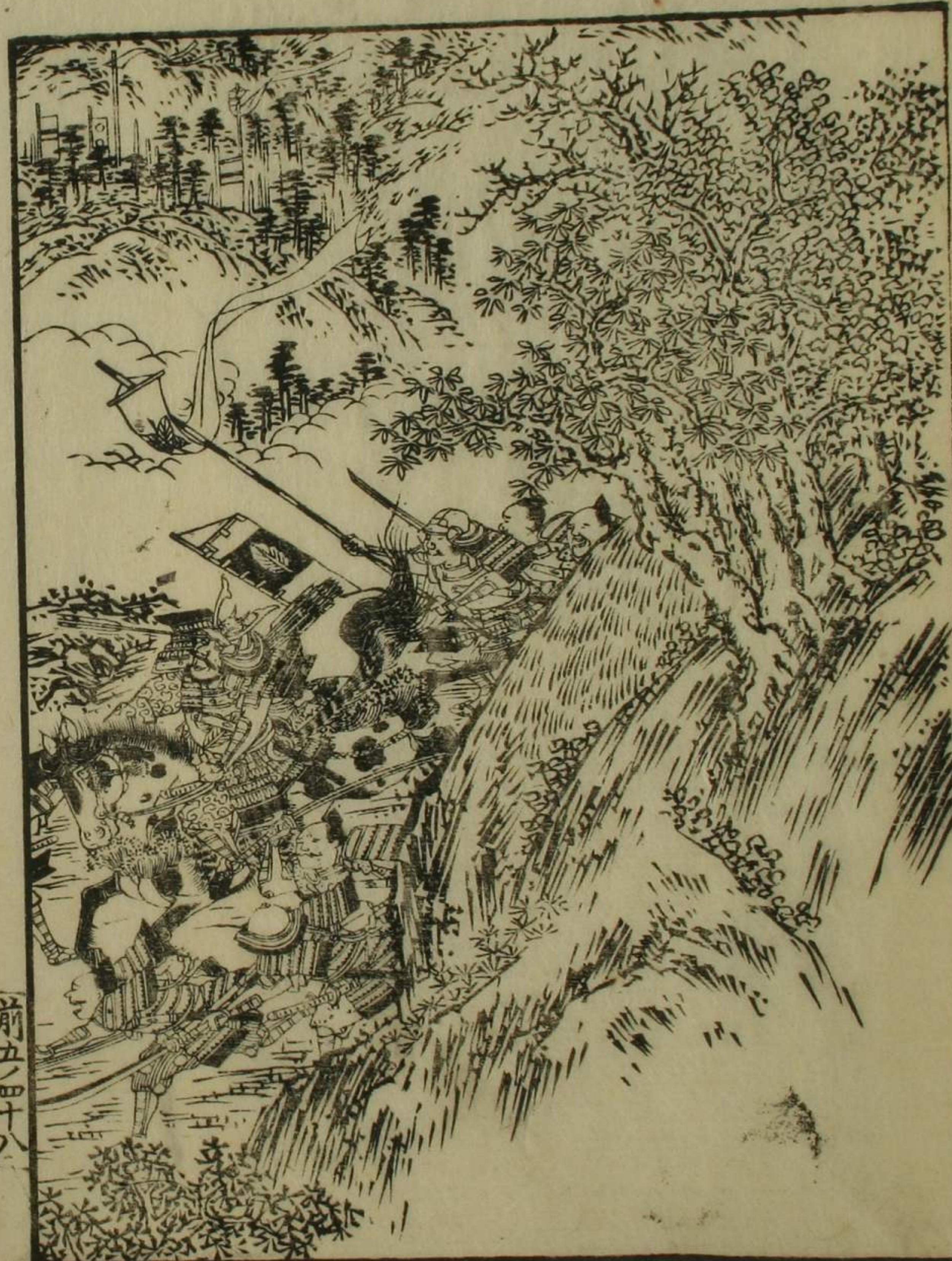
安倍頼時戰死

答へにば發の合戦を賊徒多く討ひされも頼時よりかゝらず道守府へゆく
兵糧小疲とて他方の勢ひ云ひも及ば國中北官兵まで已ぐてゆく成りたりあつ時人
將軍の済翁を奉て新兵糧を若し免され可情令狐飢死をすと名を辱んじ
夜川を攻め討ひせんか如ドを面々申合ひて時を修定進景通じて案ど
申うるべ今ひ艱苦の中に付はしひある事一人うて君の股肱耳目めだといふ者に
猶手卒亦よ付ひせば敵ひゆく威を振ひ天下に豪傑源頼義を弑みゆく滅セ
など云を東國そりよまほ天子は武士みなかせざよほく王化不歸もあら
そくも向つよどえを面々が討ひを最安されても朝家の安危を一向慮るのな
亡ふ候る時節うきば努く討ひの意思ひつけ候うば今國内饑饉して軍勢
あちうせ翁作半素うり君の済翁辱小あだひくも計をもひく兵を招く今一軍快
翁作半素

して其後國解ひす。官舟を申賜く化國の兵糧公私朝敵退済の功を發ひ半率ふ細
雜ウド幸為時興重と幽國他年の役人として奥地の案内者されば存く所を小相
觸ふる人伴囚の半と嫌に催促せられ作つみか將軍の武徳を慕ひ頼時ケ暴惡を
憎の士馳奉ひ金をゆく作と云ひ經と云ふ小為時興重は義激ふ然とく翁作實
も幽國賤請の者共其罪をすふ而免宥とく麾下に石と作つて兵の千や二千を容易
駆遣させしゆく翁作先試モ奥方に打越されと催し作べてとく頃て為時興重等
小沛賜とせ給ふり去程よ氣化郡司金萬時下毛野興重使節とて奥地
旅歴すて便宜の兵糧を多々安倍富足とつ者と姑免訴の流人伴囚を
又絶至仁土呂志。字名利の家狀もくせ馳集とく其勢武ふ騎少威少少少
前小安を支頼時と子恩貞仕官仕事の小夜川城を守り身を八月上旬より
多海の柵を居する然ふ為時興重の軍兵が車と総守府を守るを圖
て大手勢を退治延引せば必大半に及ぶ。急と兵が出一道の殺所を構えて

為時興重等が討多強軍勢と陣守肩に全てを取れも取敵に自軍兵三千百餘騎派車にて九月三日の午後小ち海とお立ち為時興重かくも聞く是ぞ至る所
あれとて賤く軍が分る時七百騎馳て先陣小進先バ興重と五百騎少く後陣小
備と安信富忠の法部俊因八百騎馳と慙と三里引下を支てう駄てに四日の
己未小丙陣の兵栗阪と下訴生て十文字手引令すう頼時モソヤ鬼見るう早く
鰐波と其上を下る為時が兵とも曾て鬼ひよき所停まく儀と旗押立照どして慙
志立く育て闇を人寄せり頼時一々空官軍の様派見る小闇一舟も似ぬ小勢モ
一ノ馬物具もかぐーを出立る者も取く威と腰刀模とす使者も太刀を掌ば
威と胸吹計玉て小具足と着て瘦馬小吉腹巻見苦かし形勢なり頼時かくせ
む參へりかる故の分際哉安らへ鳴半の者ありて哭じて聞へ一程小我自ら出馬
せり何ぞ三種程の辛小軍が生とまとの辛いあうー者ととて小見悔くいた沛
方の若者た後日の手もよあれ馳寄く握付ふ付ねと太音上と下知られ
前立ノ四十七

早雄の若者は唯一株小打被んや我先手と責追げく案に相違て官軍は先
驕ば松の一村居そる隣も拘え引攻射うる多款不費手射され頭とるを
二陣入管と阪中まで攻上する者矢程不情に射立る間是もあひて引退く終り
一程小後ある兵りと攻めかけちと云者もあくろう間唯矢軍小時を接
多氣不矢程も悉く射そな色びみづれふ威くこれを防ぐ故と荒毛入
替く追上一追下それ十五度まで其武ひづる為時興重時分好と相國の檮公
呼一これを兵どもみる一太刀打てて引退と馳連くに追上りるが故と真小近
ぞ意深く始よりと云あくと云ふと思ひて今まで怪くる者と見れど悪所
難所も嫌がきを撃立く攻上る為時興重と思ふ國小故派車引寄後ある幕に
下て陣しれど頗時勝小手よく故の備の轡とお先よかけ殿ことト知りて
羨うるとして我陣のれどるがもあくほど官軍を攻残の安信富忠と故宋方の國
をさく駆け彼時こそありぬきと群の手と下し無進をす今故の攻上りたが



途を塞ふ上と又山よす陣を兩相繫を守る極爲苦一圓と咄と走よすけの頼時が
兵ども思ひあらず後を圍まれ本没少缺とうべく途方滅失ひ居する所を爲る時興主
藤原經と並び政上とひ家忠とふよし御を説へて敢く反對を爲すうえ本相時
血氣の勇者多く陣中駆馳廻く下知く々まかし上の故を小勞されども荒々と藤原
多勢うやつとも馬下小勞せりより却敗ん半轍かづいて急ちして平陽奉
ゆく試合へて高安小平と衝りたる是や運の鬼也うん雅射うともかく久矢
本く頼時が締め齒の外う骨砾碑とまづうらみ身毒者うりせば良も皆
倒うれども源氏種姓もく我痛手負ひて見を寄方忽敗一箭く首を斬
落一敗んと思ひ自れ公も遂ひ立とよ其まからぐる棄轡の筋輪を力取くも
負くる体を見せざる空を慨て士卒機を爲す以前の下か瓜字とく興童と陣下
暮へて驚く試ひほはとかけぬあく圍く陣を引みづる稍曉景に乃ひれい官軍
も續て追げ其日の軍へ被也ふたり去程お頼時と名海小馬下馬うち下へ物具腰

之れを忽息絶ぬ一族即從駿と駿だ薬用ひれどしぬれをか一息出ぬ海之貞仁
宗任と義川宗と妻と名海小春と其外の徒従眷属もみか集まつてぐる有病
あらうと頼時眼を開ひて胸中沈黙と一苦氣りる息の下もうひりつて乞
得以者ばく舉動哉人半の詔成うけねぐら面との柵を守り何とぞうふまます
や汝も我侍よ在すれぞさく死を乞ひ令活ぞと紀君教かくとて一一定圓と観
だ一早く帰く柵と守と又真任宗任懸不開け我家家一族廣く一威い
万人の上小之頼義深く偏執して自家と傾んで終てとつゞき嘆号強く
殺てかき力のみひ自家も亦うゑくかきてお対して済と宥意もみまじが各
國の守くて在役をせりとも仕充は上法をへ一上れば其任ふことをかく事
至くとも今更に計痛手負く將を死んとく足頼義が折辱が生じて清一
さうある父が仇を解ふ半形く頼義父と云はれ城を一南附頼義と天下
の豪傑にく肩と並べる者か一かき父とぞく滅へてはん七道の武士一人

そ從の處をとりてその有様と相稱く意傍あるべどと云ふて即ち同治
て遂不祀とす所とばけ遺言よりく一門法從中陰繼后の嘗まかくみかにう跡え
ふ歸る今茲の要用の外化事あらび勤く頤寧府を今後為時興重富忠等
務脣ふうりく安倍賴時珠伏の様公參へ昇ふ官符と賜く法國の兵をもく
兼ての兵糧公納とかの經類を牒代をぐて天喜五年六月圓解を進みけれ
日公廢く圓解上焉セアグ朝廷より僧卿奏列して報辭あら其圓解す曰

臣使金爲時下毛野興重等甘利說奥地俘囚令興官
軍於是鉅屋仁土呂志宇曾利合三郡夷人安倍富
忠爲首發兵從爲時而賴時聞其計自往陣利害衆
不過二千人富忠設伏兵擊之嶮岨大戰二日賴時
為流矢所中還鳥海柵死但餘黨未服請賜宦符徵
發諸國兵士兼納兵糧悉誅餘類焉隨宦符召兵糧

發軍兵臣賴義誠惶誠恐謹言

天喜五年九月日

額時珠伏の上より勅賞と行と法車の方と僕と御教を深承せしをうべ
て宣子もあく或ちやく懇肺珠伏の幸を大功とすと残業いもと服せん國
内難盤波うちの間歎美無念の幸ならず宣子も多うなればゆど恩愛の所法
りかく法國の軍勢降伏兵糧移送の官符のと申下され

